

知求会ニュース

2025年4月

第93号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

張喬(国際学研究専攻・14期生)さん(国博第38号)が、2024(令和6)年3月25日(火曜日)に昨年春授与された匂坂宏枝さん・任暁艶さんに続いて博士(国際学)の学位を授与されました。なお、張さんの論文要旨などは「博士録66」に掲載されていますので、併せてご一読下さい。

これまでの国際学部・国際学研究科(修士課程および博士前期課程)出身者の学位取得者は、博士(国際文化)(東北大学)2名・博士(文学)(名古屋大学)/(筑波大学)/(東北大学)4名・博士(人文科学)(お茶の水女子大学)1名・博士(人文学)(パリ東大学)1名・博士(芸術学)(筑波大学)1名・博士(社会学)(一橋大学)2名・博士(農学)(東京農工大学連合大学院)2名・博士(国際学)(宇都宮大学)27名・博士(経済学)(名古屋市立大学)1名・博士(観光経営学)(慶熙大学校)1名・博士(人間・環境学)(京都大学)1名・博士(学術)(杏林大学)/(筑波大学)/(東京大学)/(一橋大学)/(法政大学)6名・博士(国際開発学)(名古屋大学)1名・博士(国際関係・紛争・平和学)(キングス・カレッジ・ロンドン)1名・博士(経営学)(立命館大学)1名・博士(医学)(自治医科大学)1名の計53名です。(2025年4月1日現在)

◎ 修士課程、修了おめでとうございます！

国際学研究科博士前期課程の後継である修士課程 地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにおいて修士(国際学)8名および多文化共生学プログラムにおいて修士(学術)8名が誕生しました。

◎ 教職員人事異動

ケオマノターム マリー国際学部教授

ケオマノターム先生が昨年、9月30日付をもって国際学部を退職されました。国際学部には1994年10月から30年の間在籍され、多くの方が先生にお世話になったことと思います。大変お疲れ様でした。

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞(令和7年1月23日)3面に、「地域で考える気候変動適応」「宇大ワークショップ」と題して、高橋若菜先生(宇都宮大学教授)らの記事が掲載されました。

2. 日刊工業新聞（令和7年2月21日）7面に、「今こそ導入 地中熱空調」「“途上国・日本”返上へ」と題して「東京「エコルとごし」エネ消費 61%減！」「設置費用、10年で回収 DC増加で出番」の内容で高橋若菜先生(宇都宮大学教授)らの記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和7年3月1日）3面に、「映画「新渡戸の夢」上映会」と題して、「8日に宇都宮で」「夜間中学 意義知る機会に」の内容で田巻松雄先生(宇都宮大学名誉教授)らの記事が掲載されました。
4. 毎日新聞（令和7年3月4日）19面に、「教育の原点考えて」と題して、「宇都宮・8日記録映画上映」「新渡戸稲造開設「遠友夜学校」足跡たどる」の内容で田巻松雄先生(宇都宮大学名誉教授)らの記事が掲載されました。
5. 毎日新聞（令和7年3月11日）12面に、「文化の森」紙面で「私の記念碑」コーナーにおいて「恩師の導き アンコール遺跡に衝撃」と題して、石澤良昭先生(元国際学研究所非常勤講師・元上智大学長)の記事が掲載されました。
6. 毎日新聞（令和7年3月17日）12面に、「文化の森」紙面で「私の記念碑」コーナーにおいて「学究の熱 カンボジアに注ぐ」と題して、石澤良昭先生(元国際学研究所非常勤講師・元上智大学長)の記事が掲載されました。
7. 毎日新聞（令和7年3月24日）8面に、「文化の森」紙面で「私の記念碑」コーナーにおいて「文化遺産軸にASEANの輪」と題して、石澤良昭先生(元国際学研究所非常勤講師・元上智大学長)の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 下野新聞（令和7年2月9日）20面に、「エンジョイ！キャンパス 県内大学リレーコラム vol.21」として「宇都宮大学 ゼミ紹介」と題して、「多文化共生 課題を発見」の内容で申恵媛研究室の湯田大翔^{ひろと}さん(国際学部国際学科4年・掲載時)の記事が掲載されました。

◎新刊案内

1. 菅野智博著(国際学部国際社会学科第12期生)『満州の農村社会—流動する労働力と農家経営』慶應義塾大学出版会 2025年2月29日
2. 国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、多文化公共圏センター年報 第17号 139頁が刊行されました。目次を以下に記します。（敬称略）

はじめに

清水奈名子

I 特集「国際学部30周年と多文化公共圏センター」

国際学部設置30周年を迎えて —30周年記念事業の紹介—

清水奈名子

国際学部設置30周年記念シンポジウム —基調講演「国際学部 30年の歩み」—

中村 真

国際学部設置30周年記念シンポジウム —卒業生・在学生によるパネルディスカッション—

出羽 尚

II 投稿論文

- チェコ人大学生の日本語発音 ―身体感覚と能謡の実験的実践― **松井貴子**
- 栃木県立夜間中学設置準備過程の推移、特徴、問題点 **田巻松雄**
- 研究ノート「日本型初等・中等教育」の構造と高等教育・研究構造の収斂
―日本の教育・研究の停滞・衰退の要因に関する一考察― **北島 滋**
- 足尾銅山開発の光と影を考える ―日本の最初の銅山開発モデルの教訓― **重田康博**
- 足尾銅山開発の光と影を考える ―国際開発学会第 25 回春季大会
企画セッション・エクスカージョン報告― **匂坂宏枝・重田康博・高橋若菜**

III 活動報告

- 1 HANDS 事業活動報告 **立花有希**
- 2 福島原発震災に関する研究フォーラム
―長期化する権利侵害としての原発事故被害― **清水奈名子・高橋若菜**
- 3 「国際平和と人権・人道法研究会」2024 年度活動報告「国際人権人道法
プロジェクト」「国際人権ワークショップ」「エチオピア（アフリカ連合）・
フィールドワーク」実施報告書
藤井広重・Hagiya Corredo Magda Yukari・王雨瑄・高橋世羽・伊藤大翔
- 4 UU-TEA ―現地調査と峰が丘祭―
栗原俊輔・丸山浩平・中山和香・宮ひより・山本幸樹・吹野ありさ・浅利かなた
- 5 UU3S プロジェクト 持続可能な地域脱炭素へのトランジション **高橋若菜**
- 6 グローバルサウスとの共創「日本の国際協力」「タンザニア絵本プロジェクト」
「在来知・食・健康」 **阪本公美子・内田啓子**
- 7 「多様な学び研究会」活動報告 **スエヨシ アナ・田巻松雄**
- 8 宇都宮おもてなし隊 ―地域との連携とこれから―
栗原俊輔・木村崇是・春日明大・益子佳大・脇島栄斗
- 9 多文化公共圏実践演習（グローバル）C ―国際学部生のロールモデルとして―
松井貴子
- 10 多文化公共圏実践演習（グローバル）D ―スリランカ・紅茶をつくるひとたちに
会いに行く― **栗原俊輔**
- 11 「韓国の移民政策における包摂と排除」
―2024 年度第 12 回多文化公共圏フォーラム報告― **申 惠媛・崔 佳英**
- 12 「Gender Digital Gap in Sri Lanka / スリランカにおけるジェンダー・デジタル・
ギャップ」 ―2024 年度第 19 回多文化公共圏フォーラム参加記― **李 亜姣**
- 13 Finding their Niche = Unheard Stories of Migrant Women― **Sugit ARJON**
- 14 2024 年度 多文化公共圏フォーラム一覧
- 15 多文化公共圏センターワーキングペーパーシリーズ

IV 関連資料

- 1 組織
- 2 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱
- 3 執筆者等一覧

*** 『HANDS next—とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ**

2007年9月20日に、ニュースレター『HANDS』第1号が発行されました。2010年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第30号(2025年3月25日)

2024年度のHANDS事業を振り返って

国際学部准教授 **立花有希**

学生ボランティア感想：AMAUTA 夏休み宿題支援に参加して

国際学部4年 **遠藤伶菜**

学生ボランティア感想：学生ボランティア派遣を体験して

農学部1年 **橘内咲紀**

「多言語による高校進学ガイダンス」に参加して

国際学部4年 **尾崎絵理子**

真岡市イヤー・エンド・パーティに参加して

国際学部3年 **飛田遙**

内地留学生としてHANDSの活動に参加して

国際学部内地留学生（小山西高等学校） **大越洋祐**

事務局だより

—令和6年度活動—

1. 外国人児童生徒教育推進協議会（後援 栃木県教育委員会）：
第1回 2024年7月5日（宇都宮大学・UUプラザにて開催）
第2回 2025年2月4日（同上）
2. 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
3. 真岡市AMAUTA 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア夏期集団派遣：
7/24、7/31、8/7の合計3回（参加延べ人数18人）
4. 多言語による高校進学ガイダンス：10月19日（宇都宮大学・大学会館にて開催）
5. 2024年度多文化公共圏フォーラム第24回「多文化共生社会の実現に向けた大学の取り組み」：12月7日（宇都宮大学・大学会館にて開催）
6. 真岡市国際交流協会主催国際交流の集い「イヤー・エンド・パーティ」：12月8日
7. ニュースレター『HANDS next』第30号の刊行：3月
8. 栃木県における外国人生徒の進路状況調査：2月～3月

◎ 第十回重田ゼミ研究会が2月8日(土曜日)午後1時30分から4時50分まで、國學院大學院友会館にて開催されました。報告者は以下の通りです。

1. **重田康博**先生 「近況報告」

—足尾銅山視察(国際開発学会、宇都宮大学)、サルボダヤ運動故アリヤラトネ氏追悼講演会、JANIC/THINK Lobby、カンボジア調査、アジア・アフリカ研究所、JICA 環境社会配慮助言委員—

2. **六川彩水**

「JICA 海外協力隊帰国報告」—マダガスカルでの栄養・衛生啓発活動—

3. **ダハル・スティップ**(国際交流研究専攻13期生)「農村開発の手段としてのエンパワーメント」～シャプラニールのネパール防災活動を中心に～

4. **半田昌弘**(国際交流研究専攻6期生)「日本の高速道路から、道路資産の在り方を考える」

5. **加藤靖**(国際交流研究専攻6期生)「近況報告と重田ゼミ研究会について(案)」

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. 中国語：基礎から文化への探索訪 2025年06月01日(日)1時限～4時限

2025年06月08日(日)1時限～4時限

趙敏先生(宇都宮大学非常勤講師)(国際学研究科国際学研究専攻第4期生)

2. 実践的な英語コミュニケーション 2025年06月07日(土)1時限～4時限

2025年06月14日(土)1時限～4時限

バンウェル ローリー先生(宇都宮大学准教授)

3. フォーマルな英語を学ぶ 2025年06月28日(土)1時限～4時限

2025年06月29日(日)1時限～4時限

佐々木一隆先生(国際学部准教授)

4. 多言語コミュニケーション 2025年05月18日(日)1時限～4時限

2025年05月25日(日)1時限～4時限

吉田一彦先生(宇都宮大学教授)

5. 媒介者としての日本近代文学 2025年05月31日(土)1時限～4時限

2025年06月07日(土)1時限～4時限

丁貴連先生(宇都宮大学教授)

研究室訪問 62 第9号から国際学研究科に関する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

博士録 66 第22号から国際学部、国際学研究科に関する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「日中における環境パートナーシップの比較考察 —地方都市におけるプラスチックごみの削減取組を事例として—」

張 喬

・論文要旨

世界経済の発展と生活様式の変化に伴い、大量のプラスチック（以下、プラ）ごみが自然環境に排出され、深刻な汚染問題を引き起こしている。従来のアプローチとして、ごみの回収とリサイクルが強化されてきたが、これらは資源消費と CO₂ 排出を伴うことを明らかにし、使い捨てプラ製品の使用抑制こそが根本的な解決策として注目されるようになった。

1990年代以降、世界中で使い捨てプラ製品の使用抑制・禁止政策が導入されてきた。中国では1999年から、使い捨て発泡スチロール食器の撤廃、レジ袋の有料化などが進められた。しかし、これらの政策は法的拘束力を欠いており、実効性には限界があった。一方、日本では2020年になってようやくレジ袋有料化が全国的に導入されたが、政策の進展は大きく遅れている。

両国共に使い捨てプラ製品の使用抑制には課題が多いが、亀岡市（日本）や海口市（中国）は逸脱事例として注目される。亀岡市は、日本で初めてレジ袋禁止条例を制定した。海口市は、中国の市としては初めて、プラ禁止宣伝大行動を実施した。

本研究では、逸脱事例がどのように政策形成や実施に成功したのかを「環境パートナーシップ」の視点から分析した。特に、NGOに関心を寄せ、その政治的機会を踏まえた上で、両国における亀岡市と海口市の政策プロセスを比較した。

分析の結果、国家レベルでは、両国ともに環境 NGO や政府間の対等的なパートナーシップが形成されてきたとは言えない。中国では、政策がより快速的に発展できた要因は、深刻なプラごみ汚染問題により自国の国民が受苦アクターになり、それが中央政府のプラごみ汚染問題への重視を引き起こしてきたことである。

地方自治体レベルでは、亀岡市は観光業への影響を受けて地域の船頭らが戦略的に外部に問題を訴えた。その結果、市民や行政との問題意識やビジョンの共有が進んだ。このような背景に、環境意識が高い桂川市長の就任後、レジ袋禁止条例が策定され、実施された。さらに、亀岡市は環境 NGO が意思決定に参加できる常設プラットフォームを構築し、NGO の意見を積極的に政策に反映させることで対等なパートナーシップを築いた。

一方、海口市では、ボトムアップイニシアティブはほとんどなく、政策は基本的には国及び省レベルで決定され、NGO との協働は一部に限られていた。そのため、亀岡市のような対等なパートナーシップは存在しなかった。

結論として、使い捨てプラ製品の使用抑制・禁止を実現するためには、「受苦の表出」「強い政治の流れ」「対等なパートナーシップ」が重要であることが示された。トップダウン色の弱い日本では、国内外の受苦に鋭敏になったうえで中国のような強力な政治的リーダーシップと迅速な政策実行を参考にすることができよう。中国は日本の市民参加やボト

ムアップ型協働の手法を学ぶことで、それぞれの取り組みを補完し合うことができよう。亀岡市や海口市の事例は、政治的意思、行政と市民の協働、そして産業界との対話が揃った時、持続可能な成果が生まれることを示しているのである。

・苦労話や後輩に向けたメッセージ

これから論文を執筆する後輩の皆様へ、私が重要だと思った点を共有いたします。少しでも参考になれば嬉しいです。

私は社会科学分野に所属しています。社会科学分野では、論文の問題関心や研究目的、および分析枠組を早めに確定することが大切です。これらは論文執筆の最も重要な基盤となると思います。具体的には、自分が何に関心を持っているのか、論文を通じて何を明らかにしたいのか、そしてどのような基盤で論文を書くのかを明確にすることです。これらは論文の大切な部分であるため、時間がかかります。この段階では、どう書けばよいか迷ってしまうことがよくあるかもしれません。そんな時は、早めに先生や研究室のゼミ生たちに相談してアドバイスをもらうことが大切です。一人で悩み続けるのは避け、他の人の意見を聞いてみましょう。誰もが最初は分からないことだらけですから、心配せず、少しずつ進めていけば必ず解決できます。

基盤が決まったら、次は論文の執筆計画を立てましょう。社会科学の研究では、大量の社会調査やインタビューなどを行うことがあります。事前に調査や執筆の具体的な計画を立てておけば、後で慌てることなく進められます。同時に予期しないトラブルも想定しておくと思いいます。例えば、パソコンが故障したり、文献管理ソフトがうまく動かなかったりすることもありますので、事前にバックアップを取るなどの準備も行うほうが良いと思います。

論文を執筆していくうちに、最初の研究目的を忘れてしまい、論文の方向性がズレてしまうこともよくあります。これによって、最終的な結論が最初の目的と一致しないという問題も生じかねません。そのため、執筆中は常に研究目的を振り返り、論文の方向性を適宜調整することが大切です。行き詰まったときには、この点を振り返り、論文全般を俯瞰してみると、新たな発見や視点が得られるかもしれません。

最後に、論文執筆は頭を使うだけでなく、自分自身との心理的な戦いでもあります。論文を書いていると、長時間パソコンに向かってもアイデアが浮かばなかったり、書いた内容が完璧でないことを心配したり、一日中パソコンの前に座っているのに全く進まないこともあるかもしれません。そのような時、どうしても焦りを感じることもあるでしょう。しかし、私は「まずは書き進めてください」と言いたいのです。たとえ出てきたものが「ごみ」だとしても、私はその「ごみ」を書く権利があるのです。一步踏み出さなければ、何も変わりません。思うように進まない時には、自分を責めるのではなく、焦らずに挑戦として楽しむことが大切です。論文は学びの一部に過ぎません。自分を試すゲームのように捉えることで、意外な楽しさが見つかるかもしれません。

最後の最後、皆様が順調に、健康で、理想の自分に出会えることを願っています。

(国際学研究科博士後期課程国際学研究専攻 第14期修了生・
国際学研究科国際社会研究専攻 第20期修了生)

(2025年3月7日原稿受理)

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

「国際学部から国際文化研究科へ」

東北大学国際文化研究科言語科学研究講座博士前期課程二年

陳 泓宇 (チン ヒロタカ)

私は2019年度国際学部国際学科に入学して、様々な分野の授業を受けたあと、言語学研究室に入り、初習外国語のスペイン語と日本語の好意表現をテーマに卒業論文を書きました。卒業後大学院に進学し、今は東北大学の国際文化研究科の言語科学研究講座という所に在籍しています。接触言語学という立場から、古代中国の書き言葉の漢文と接触することで日本語はどのような変化が生じたかを大まかなテーマとして、学部時代専攻にしていた言語学の知識を活かし、さらに精進しています。

東北大学国際文化研究科は「地域文化研究系」「グローバル共生社会研究系」「言語総合研究系」という三つの研究分野によって構成されています。それぞれの分野にはさらに「ヨーロッパ・アメリカ研究」「国際政治経済論」「言語科学研究」「応用言語研究」など下位分野としての講座があります。それぞれの講座に4～6名の教員が配属されています。学生は入試・出願の時から〇〇講座の〇〇先生のもとで勉強すると決めておく必要がありますが、入学後、他の講座・研究系の授業にも参加できますし、他分野の授業単位も卒業単位として認定されます。

続いて、入試方法についても触れたいと思います。国際文化研究科には年に2回入学試験が行われます。基本的に7月中に出願し、9月中に試験を受ける秋季入試と12月中に出願し、2月中に試験を受ける春季入試があります。秋季入試と春季入試の試験内容に大差がなく、今現在主に「研究計画」「事前課題」「語学試験」「口述試験」という4つの部分によって構成されています。「口述試験」はコロナ以降オンラインで行われるようになり、研究計画と事前課題を中心に問われます。「語学試験」は外部試験の成績で換算する方式が取られており、英語に限らず、主要言語なら基本的に受けられます。また、国際文化研究科には、4月に入学する「講座」の他に、すべての授業と論文執筆を英語で行う、海外留学生を中心対象とした10月入学の英語プログラムもあります。

国際文化研究科に入って二年間が経ち、私にとっての「知る人ぞ知るおすすめポイント」は二つあります。一つ目は少人数なところです。学部生を受け持たない独立研究科であるため、先生と生徒の距離が近くて、周りの人とすぐに打ち解けられます。もう一つは国際性です。英語プログラムと一緒に授業を受けることが多々ありますので、講座にいても半分以上の授業が英語で行われ、英語に触れる環境が充実しています。また、国際文化研究

科の約9割の生徒は海外留学生や海外にルーツがある人なので、日本にはいるが日本生まれ日本育ちがむしろマイノリティになるほど国際性が色鮮やかに輝いています。私によって、国際文化研究科は国際学部の延長線上にあるようなところだと感じていますので、卒業後の一つの選択肢としてお勧めします。私はさらに内部進学する予定ですので、お目にかかれることを楽しみにしています。

(国際学部国際学科 第3期卒業生)

(2025年3月17日原稿受理)

海外だより 35 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 23 知求会ニュース第41号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2025年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)

「第10回重田ゼミ研究会報告」

重田ゼミ OG 根本 久美子

2025年2月8日(土)、第10回重田ゼミ研究会が、渋谷の國學院大学の院友会館にて開催されました。

この研究会は、宇都宮大学国際学部・同大学院国際学研究科・地域創生科学研究科の重田康博ゼミの卒業生および修了生を主体とした会です。これまで、この研究会の発表は、主に、宇都宮大学構内の施設で開催されてきましたが、今回は学外にて開催されることになりました。

当研究会は、学外に出た後も 市民目線での論点を 大学・大学院時代に学んだ学術的思考で、活動・調査・研究をつづけた結果を発表し、議論しあうことで、互いに研鑽しあう場として位置づけられており、重田ゼミを巣立ち社会人となった人たちと、重田ゼミ在籍

中の学生たちの懇親の場ともなっており、重田教授が宇都宮大学を退官した後も継続されています。コロナ禍の間は、ズームを用いて開催されていましたが、今回は、久々に、対面での研究会実施となりました。

今回の第10回研究会は、研究発表というよりは、参加会員の近況報告と重田教授を含めた五人の活動報告とが中心となったものでした。

まず、最初に、重田教授から、宇都宮大学での国際開発学会として、足尾銅山視察の報告のほか、教授のこれまでの研究活動の軌跡について（JANIC, THINK Lobby, JICA アジア・アフリカ研究所など）のお話がありました。そして、教授の研究は「人との出会い」によって築かれてきたことが伝わってきた報告でした。特に、サルボダヤ運動を牽引してきた故アリヤラトネ氏や国際文化会館の重鎮でいらした故松本洋氏の追悼を通して、「人との出会い」が人生においていかに重要であるかを感じさせるお話でした。

重田教授の後、研究会の4人のメンバーから活動報告の発表がなされました。

最初の発表は、宇都宮大学卒業後、JICAの青年海外協力隊員としてマダガスカルにて栄養・衛生啓発活動にかかわってきた六川彩水さん（16年度・17年3月卒業）から、帰国報告として行われました。彼女のマダガスカルでの活動は、先輩たちの活動の基盤があってこそできたものであり、日本の継続的な海外支援こそが成果に繋がっているという話に、彼女の謙虚な態度と日本のODAの在り方が伝わってきた報告でした。

続いて、ダブル・ステップさん（17年度・18年3月修了）から、現在、彼が勤務しているNGO シャプラニールのネパール防災活動についての報告がなされました。2024年9月に、ネパールでは、大規模洪水と地滑りが発生し、150人近くの人々が亡くなりました。こうした状況を踏まえ、彼は、「農村開発の手段としてのエンパワーメント」というタイトルで、活動状況を発表してくれました。母国の災害に日本のNGO職員として関わった彼に、発表の後、私たちはかける言葉もありませんでした。

そして三番目に、現在日本高速道路株式会社（NEXCO）の関連会社に勤務している半田昌弘さん（10年度・11年3月修了）が報告を行いました。彼は、「日本の高速道路から、道路資産の在り方を考える」というタイトルのもと、高速道路の側道に存在している「自治体に及ぼす問題点」を私たちに突き付けました。普段気にも留めていない道路における課題を正面から捉えた発表でした。

そして、最終発表は、当研究会の会長である加藤靖さん（10年度・11年3月修了）によるこれまでの彼自身の活動状況と近況の報告でした。彼は、宇都宮大学大学院入学以前に、パナマで青年海外協力隊員として尽力しており、そのパナマでの様々な活動の経験が宇都宮大学大学院でのNPOの研究や当研究会の発足と継続に活かされ、こうして10回目の研究会開催に繋がっているということを痛感させられた報告でした。

今回の第10回重田ゼミ研究会について私個人の感想を申し上げるなら、重田ゼミを巣立った会員たちが、今も尚世界や社会の課題に目を向け且つ積極的に関わっているという

点において、重田教授の背中をしっかりと追いかけていると感じさせる意義ある発表会だったと思います。

今回は、国内外から十数名の参加者があり、元留学生だった会員も中国からわざわざこの研究会に馳せ参じてくれました。嬉しい再会があり、考えるべき問題を議論し、楽しい懇親のひと時を過ごして、第10回重田ゼミ研究会は盛会裡に幕を閉じることができました。

(国際学研究科国際交流研究専攻 第4期修了生)

(2025年3月22日原稿受理)

国際学部学位授与式から

国際学部

・成績優秀者 1名

人見 俊輝

2013(平成25)年度より、学位記授与式において卒業論文を表彰する賞が設けられました。表彰者は以下の通りです。

・最優秀論文賞 1名

- ① 人見 俊輝「アフリカにおける貨幣・市場の浸透と相互扶助 ―ガーナに焦点を当てて―」
阪本公美子研究室

・優秀論文賞 2名

- ① Wan Nur Aliyah Binti Wan Ramzan 「Malaysia's Look East Policy : Knowledge Transfer under Education Program for Government Officials in Japan」 スエヨシ アナ研究室
② 大塚 日花里「日本語を母語とする英語学習者による物体不可算名詞の誤りとその原因」
木村崇是研究室

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から**年2回発行(4月1日、9月1日)**の変更になりました。

今回の第19号の内容は、1. 交流会レポート 「中村先生、アンジョン先生ご来タイ」 / 「現役宇大留学生との懇談会」 / 「柴田さん壮行会」 / 「現役宇大生留学生送別会」 2. タイの昨今(第19回)むすこ出家(見習い僧)する 3. 連載コーナー 狙えインスタ映え! ? アジア取材雑記第15回 『50年目の“バリボ・ファイブ”』 4. 連載コーナー ~懐かし一枚~ とともに感じる東南アジア(第15回)暑ささえ楽しめたのは若さゆえ です。

EU 支部だより

知求会ニュース第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部

「Newsreel World」を発行してきました。今回の 53 号の内容は、1. イタリア モーターバレーで誕生する新しい超音速ジェット：Fly Concorde のプロジェクト
2. EU 支部だより 一日伊の技術と情熱の結晶！？—です。

編集者のひとりごと

●去る 2 月 21 日夜から 24 日昼まで、金沢市に用事があり市内の主な建築を探訪してきました。前回宿泊したホテル（ドリーイン金沢）の隣に新しいホテル（スマイルホテルプレミアム金沢東口駅前）が出現しており、ホテル建設ラッシュの景観で様変わりしていました。ホテルは中国語が飛び交っていて、外国籍の観光客でにぎわっていました。

●22 日はシェアハウスの下調べを終え、金沢駅構内を抜けて、石川県庁へ雪道を歩きました。今回、初めて金沢駅西口を散策しましたが、さながら地方都市とは思えない「けやき大通り」の都市景観でした。展望台から西方面には初めて見る金沢港が一望できました。

●県庁での用事を終え、「金沢海みらい図書館」（設計：シーラカンス K&H）を訪問しました。この図書館は 2012 年「世界で最も美しい公共図書館 25 選」に選ばれた図書館です。雪景色の中の建築はなかなか見られないものなので、雪道を歩いた苦勞が報われました。その後、歩いて荷物を預けたホテルに戻り、次の宿泊先（カプセルホテル 41）にチェックインし、30 年ぶりに再会する後輩と片町の居酒屋で「金沢おでん」を堪能しました。22 日の歩数は 29,253 歩でした。

●翌日 23 日は、以前から行きたかった「谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館」（設計：谷口吉生）を朝一番で訪問しました。企画展は「知と美の新拠点・小立野 一石川県立図書館と金沢美術工芸大学」でした。以前に学会で訪問した金沢美術工芸大学は立替られていました。この後は、一路「国立工芸館」へ向かいました。

●石川県立図書館（設計：環境デザイン研究所）へも徒歩で行きました。聞くところによると人気のスポットで、道路は渋滞のようでした。図書館内部はこれまでの、図書館のイメージとは違っていました。本の開架に工夫がされていて、テーマパークにいるような錯覚を覚えます。老若男女で大いに賑わっていました。歩数は 19,967 歩の建築探訪でした。

●最終日 24 日に訪問した玉川図書館（設計：谷口吉生）は落ち着いた図書館でした。シェアハウスから徒歩で行ける公共図書館なので、日常使いの図書館になると感じました。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@gmail.com